選者選評

稲畑廣太郎　先生

今年も沢山の御投句を頂きありがとうございました。皆様の力作をとても楽しく選考させて頂きました。

御存知の方も多いと思いますが「俳句」という言葉は「俳諧の発句」つまり五・七・五・七・七……と連なる俳諧の最初の五・七・五の発句を独立させた文芸として正岡子規が約めて「俳句」と名付けたのが始まりです。明治時代のことですので、その当時、当然文体は今で言うところの「歴史的仮名遣い」で表記されていました。戦後この仮名遣いは現代仮名遣いとなり、最近は俳句でも現代仮名遣いが増えてきたように思います。今回の皆様の作品の多くが現代仮名遣いでしたが、少し時代を遡ったつもりで歴史的仮名遣いを、少し勉強して使ってみるのも味があって良いのではないかと思います。又古今の名句を鑑賞する時でも、それらの句のほとんどは歴史的仮名遣いであることが多いので、その時にも役に立つのではないでしょうか。そんなことを思いながら特選、入選の講評をさせて頂きたいと思います。

参考書ことりと開く冬の朝　　安藤　優帆

特選は安藤優帆さんの作品です。受験勉強に勤しんでおられるのでしょう。この時期は入学試験の最後の追い込みで大変ですね。参考書を開くときの「ことり」という音が冬の寒さと、勉強の緊張感を表わしています。

空蟬や遠くにみてる白い雲　　松長　拓巳

蝉の脱け殻である空蟬を詠んでおられます。空蟬自体にはもう命が宿っていないのですが、まるで生きているように雲を見ているという表現が素晴らしいですね。

稲の波千年前も星の下　　澤井　翔

この辺りは千年の昔から稲作をしているのでしょう。日本の稲作文化の誇りのようなものが感じられます。

夜ふけて夢の隣に月ひとつ　　植木　琉生

満月の夜楽しくお月見をしたのでしょう。夜もふけて寝る時間となっても、その美しい月は夢の中まで入ってきてくれるのです。ロマンチックな月が描けました。

夏の星川面に揺れて消えてゆく　　斉藤　花恋

川に映っていた星が流れに揺れるように見えて、やがて消えてゆく。夏の涼し気な空と川の対比が素敵です。

音だけの花火大会帰り道　　持永至歩里

まだ花火大会は続いているのでしょう。帰り道は花火の音だけが聞える。少し残念な心持をも感じます。

皆様の今後の御活躍をお祈りいたしております。

選者選評

選の後に

日高堯子　先生

文芸コンクールの選者として今年も多くの若い感性に出会いました。その中にはすでに記憶している名前もあり、毎年挑戦してくれることを嬉しく思いました。

今年特選に選んだ歌はこの一首。

サングラス外す瞬間眩しさが思い出の中色づいてゆく　松島日菜乃

サングラスを外した瞬間に飛びこんできた光の感覚をとらえたものです。その「眩しさ」は誰もが経験することですが、この歌では「思い出の中色づいてゆく」と直感的に表現しています。抽象的な言葉なので、意味を正確に解釈することは難しいですが、ここには一つの光の体験が歌われているといってもいいのでしょう。受けとった光が自身の中に内面化していく時の、独特な感覚の体験です。鋭敏な感覚を自身の言葉で表現した新鮮さが魅力です。

入選に選んだのは次の四首です。

稚児車白雪のこる連峰は雲をとどむやコマドリの声　清水　杏夏

君とみた秋の夕焼け写真にはうつらぬ景色あせない記憶　新垣　葵

夕暮れのスマートフォンが写し出す君と僕との夏の幻影　秋山もも子

銀白の骸が浮かぶ台風の通り過ぎて鳥群れる海　小宮　優和

寄せられた作品には青春の淡い恋を題材にしたものが多く、自然や風景を歌ったものはほとんどなかったのですが、清水杏夏さんの歌はその中の貴重な一首。稚児車は夏に可憐な花を開く高山植物ですが、その花が咲く連峰とは日本アルプスでしょうか。山並みを視野にした壮大なスケールが見えてきますが、魅力はさらに下の句にあります。「雲をとどむや」と山の景色に動きを加えながらいったん切った後、「コマドリの声」で全体をまとめています。韻律感のよい一首です。

新垣葵さんと秋山もも子さんの歌にはともに映像が使われています。「写真」と「スマートフォン」です。どちらの歌も時間は夕暮れ、そしてどちらも写真という映像を幻と見ていることが共通しています。さらに言えば、新垣さんは「写真」を超えたものを心に秘め、秋山さんには「幻影」として見るシニカルな目があるようです。恋というものの認識に違いがあるようでおもしろい。

小宮優和さんの歌は台風一過の海の情景を詠んだもの。初句の「銀白の骸」という言葉にまず強いインパクトを感じました。魅力はここにあるのですが、しかし意味はややわかりにくい。「骸」とは実際に何かの骸なのか、白波の比喩なのか、それともっと全体的なイメージなのか。意味でもイメージでももう一歩明らかになると、より秀歌になるでしょう。

応募作品には多くの青春の恋が歌われていますので、佳作の中から何首か。

電車の窓ごし君と手を振って『出発します』秋の夕暮れ　川口　円良

一輪の線香花火君と持つ揺れる光が我が頬照らす　松尾　樹乃

ちょっぴりと英語の発音ヘンテコなあなたと見たいスピカ春の夜　山田　望愛

雨の降る夜をあなたと傘さして一メートルの差を楽しんで　水田　朱音

どの歌にもいきいきとした場面があり、その現実感が歌の力となっています。軽やかな表現の楽しさ、巧みさもあります。しかしまた歌の中の線香花火や星や雨傘などは、恋の場面としては類型感があるということも頭に入れておく必要があるでしょう。情報社会である現代は、言葉も知識もイメージも素早く、広く流通し、模倣もしやすい。その中で自身の感覚と表現をいかにつかむか、なかなか難しい問題であるでしょう。またあらたな挑戦を期待しています。

選者選評

詩作を楽しみましょう

阿部正栄　先生

皆さんの作品を読みながら、思い出したのがフランスの象徴主義の詩人ポール・ヴァレリーの「散文は歩行であり、詩は舞踏である」という有名な言葉です。場面から場面へと進んでゆく散文とは異なり、詩はその場で踊ること自体が目的。言い換えれば、詩の言葉は、意味内容を伝えるという義務から解放されて、意味以前のものや、意味を超えたものにもなれるということでしょう。今回は、感性の光る作品が多くあり、悩みながらも楽しく選びました。

特選は、島田諒君の「砂時計」です。導入部分のトーンが良く、喫茶店で砂時計と僕が織り成す世界が読み手に入ってきます。「『今』の向こうに／向こうが見える」のフレーズや「目の前にある砂全部を知りたくて／僕はそっと／ひっくり返す」のフレーズで、砂時計から「不可思議な空間」を見事に作りました。

次に入選は、髙橋美音さんの「宝物はあの子」です。詩で大切な言葉のリズムをうまく生かした作品です。やさしいまなざし、あたたかいフレーズが印象的です。更に「戦争はやめてね」の強い抑揚や、「誰も悲しくならないように／何も壊れてしまわぬように」の最終連は胸を打ちます。

次の入選は、神山美優さんの「水溜まり」です。きれいな文字に感謝です。ある日の水溜まりに自分が映り、その自分を見つめ直す作品です。展開に信号機、バイク、トラック、たんぽぽを入れてのイメージ作りが上手です。「もっと遠くに行きたい／疲れなんてない」「太陽が私を覗いている」は、強くなってゆく自分を見事に表現しました。

次は、十文字咲さんの「無辜のあなたへ」です。丁寧な文字が嬉しいのとタイトルが良いです。あなたへの憧憬、敬愛、友愛、慕情を括っても、侮っても増す情愛のフレーズが痛々しいですが、それが読み手を引きつけ、魅力的なうたになりました。最終行の「冗談ですよ。」は巧みです。

入選最後は、宮原来珠さんの「天秤」です。日常で行動するとき「小さなオモリが二個乗る。／天秤がゆらゆら揺れ、一方に傾く。」傾きながら葛藤し、煩悶をくり返しながら歩む姿が目に見えます。天秤とオモリに託して、自分の成長をうたった自画像の作品です。

佳作も才気ある作品が多くありました。葛西未来さんの「怪獣」羽角早恵さんの「あなたを懐う」林紗理奈さんの「無題」など切りがありません。さらに詩を好きになり、次も力作を期待しています。

選者選評

佐藤 洋二郎 先生

小説を書くことは大変に難しい。机の前に何時間も体も動かさず、肉体的にも疲れ果てることがある。書いて駄目なら破棄してしまう。何のために書いていたのかと疲労困憊する時もある。その繰り返しで日々が終わるが、その苦労とつらさは書いた者しかわからない。それで自分はなぜ書いているのかと思うことはしばしばだが、結論はでない。仮に自分が納得がいったものを書いたとしても、読み手の思いは違い、批判を浴びる。それでもまた書く。しかしその思いがどこからくるのか、書き手自身もよくわからない。業と考えるしかないが、それゆえになぜ書くか、なにを書くかということを意識することは、何よりも大切なことである。そこに自分が書きたいテーマがあるからだが、とくに短篇小説は短いので、よけいなことが書けない。人物や場所が多く出れば、説明文や描写が増えて、作品の深度や密度が薄くなる。自分が書きたいテーマからずれていくことになるが、短篇小説はそのことを意識して書けば、自ずから産品の出来栄えも違ってくる。自分の書きたいことを見据えて、漫然と書いてはいけないのである。

『特選』の「追憶の旅人」はそういう意味ではテーマがはっきりしていていた。好きな祖母が惚けてきて、それを取り囲む家族の心情を描いたもので、深刻ぶらず、暗い作品にもならず、それを受け入れていく主人公や家族の心根のやさしさが伝わってくる。人はどんなことでも最後は受け入れて生きるしかないが、そのことが淡々と描かれ、静かに現実を見つめる距離感が良かった。

『入選』の「大人は泣かないと思っていた」は新任の教師がやってきて、痩せているのでもやしというあだ名をつけられた。何も行動を起こさず、ただ耐えているだけの教師。その姿を見て子どもたちは侮り、やがては学級崩壊になっていく。一緒に苛める者、嫌だなと思いながらも遠巻きに見ている者。無関心は強い者の味方や犯罪と作品は教えてくれる。直にはその教師の哀しみや怒りを知るが、やや大人の目線や思い出話になっているところが、もったいないという気がしたが、それぞれの心理がよく捉えられていた。

「夏の海に流されて」は絵の好きな女子学生がひと夏かけて懸命に描き、自信があった作品が選考からもれ、その上、親友でライバルが最優秀賞を受賞する。友情と進路に迷う作品で、やがてはその親友の気配りで立ち直っていくという作品。さわやかさがあった。

「今度は同じ夜空の下で」子どもの頃、それぞれに小説家や作曲家、歌手になりたいと夢見ていた者たちが、二十年後に再会したが、誰もまだ芽が出ていない。諦めそうにもなっていたが、続けられているのは夢を与えてくれた恩師のおかげだ。その三人が墓参りに行く途中に出会い、恩師を偲び、再び頑張ろうとする物語。偶然すぎる展開が気になるし、逆に創作しようとする思いが勇み足になっているが、丁寧に書かれていた。

「満ちる」は戦場に行き、傷病兵として帰国してきた兵士の話。だが彼は不安やストレスから記憶喪失者になっていた。医者に旅をすることを勧められ、日々の悪夢に悩まされながらも、人に出会い再生していく。書き方はまだ稚拙だが、作品を構築しようとする思いと、今後の伸びしろがありそうに感じた。来年も頑張ってもらいたい。

選者選評

孤独を乗り越えるために

久米依子　先生

今回の課題図書も多彩な作品が並びましたが、共通の特色として、現代を生きる私たちが抱える孤独を、改めて考えさせるものが多かったように思います。

喧噪に満ちた都会を離れ、静かな郊外へ立てこもろうとする佐藤春夫『田園の憂鬱』、大都会ニューヨークで目的もわからぬまま、他人を監視する仕事につき孤立感と不安に苛まれるポール・オースター『幽霊たち』。母国が急になくなり、母語を使う人を探して旅に出る多和田葉子『地球にちりばめられて』、人に認められたいという願いから無理をしてしまう心理を解説した磯野真穂『ダイエット幻想』、そして江戸期の庶民の暮らしと葛藤を掬い上げた西條奈加の、その名も『心淋し川』。さまざまな地域や人物たちが取り上げられつつ、どれも、社会や身近な人々との間の中で自分を保つことの厳しさと、それに伴う孤独の底深さを伝えていたと思います。

ではその孤独を克服するためにはどうしたら良いのか？　各冊の中に安易な回答は書かれていません。単に生活の場を移動したり、外見を変化させたりするだけではダメなのです。孤独は人間関係の中で生まれるものであり、関係の軸は自分がつくるものだからです。皆さんの真剣な感想文は、そのことに気づいていました。

確かな自己を確認したくても、「自己は他者との関係性の中でしか存在しえない」し、「『他者』は自己を確認する鏡や影のようなもの」（松尾歩武）であり、自分を捉えるためには、他者と自分の関係を見つめ直さなくてはなりません。しかしその際、「他者の声や評価」ばかり気にしながら「自分が何者であるか確かめ」よう（齋藤颯）とすると、「自らの感覚と感情を封印し」「当たり前の行動ができなくなって」（黒田慈愛）しまいます。あるいは、同じ地球にちらばる人間同士でありながら、他者との境界を前提とし「あるはずのない縛りに縛られ」、他者を「自分とは全く異なる人だと思い込んで」（天野寛時）、排除し対立してしまうかもしれません。自他の関係をうまく構築することは本当に難しく、その狭間に孤独が生まれます。

時には『心淋し川』中のエピソードのように、もっとも身近な家族ともわかり合えない場合があります。しかし『心淋し川』では「厳しい世の中にもまれ、あらがっている」人のそばには「町の人々の優しさが」あり、「誰かの優しさを振り払わず真摯に受けとめて、そのあたたかさをまた別の誰かにつなげる」（石田詩絵）という連鎖の可能性が示されていました。また『田園の憂鬱』の主人公の生き方は、「新しい生活で得た新たな視点」や「彼が抱えた孤独による自分との向き合い」を経ることで、未来に「多くの希望が待ち受けている」（渡辺直希）ことを感じさせました。誰もが抱えてしまう孤独を自覚しつつ、自他のあり方を考え、やがて出会う誰かへの期待と意欲を育てること。読書がその契機となり、道しるべともなることを、今回の課題図書は学ばせてくれたと思います。